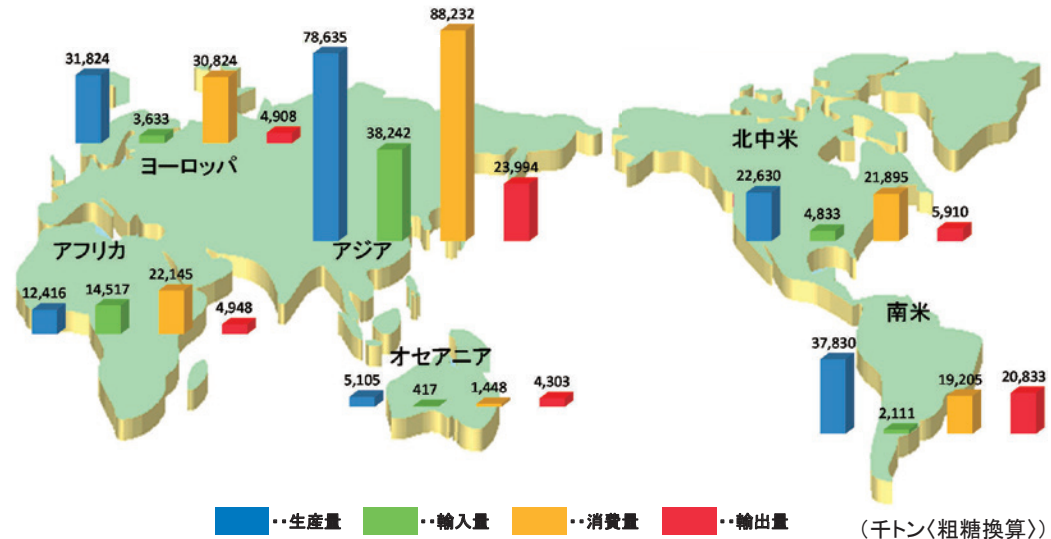


砂糖の国際需給

調査情報部 竹谷 亮佑

1. 世界の砂糖需給（2018年9月時点予測）

図1 絵で見る世界の地域別の砂糖需給（2018/19年度予測値）



資料：英国の民間調査会社LMC International「Quarterly Statistical Update, September 2018」
 注1：年度は国際砂糖年度（10月～翌9月）。
 注2：ヨーロッパには、EU加盟国とロシアほか17カ国を含む。

LMC International（農産物の需給などを調査する英国の民間調査会社）の2018年9月時点の予測によると（以下、特段の断りがない限り同予測に基づく記述）、2017/18砂糖年度（10月～翌9月）の世界の砂糖生産量は、1億9365万トン（粗糖換算〈以下、特段の断りがない限り砂糖に係る数量は粗糖換算〉、前年度比7.3%増）と前年度をかなり上回る生産が見込まれているが、2018/19年度については、1億8844万トン（同2.7%減）とわずかな減少が見込まれている（表1）。2017/18年度については、アジアを中心に生産が増加した一方、2018/19年度は、ヨーロッパにおける高温少雨によるてん菜生産の減少や、南米において競合するエタノールへの仕向け割合が増加することなどを受け、生産の減少が見込まれるとしている。

世界の砂糖消費量は、2017/18年度は1億8046万トン（同0.3%増）、2018/19年度も1億8501万トン（同2.5%増）と、増加が続くと見込まれている。最大の消費国であるインドが同2.0%増と堅調に増加しており、アジアやアフリカなど人口増加の著しい国を中心に消費の増加が見込まれている。一方、EUやロシア、日本などの先進国では、消費が頭打ちとなっている。

この結果、2017/18年度と2018/19年度は、ともに生産量が消費量を上回るため、期末在庫量については、2年度連続で増加が見込まれている。2018/19年度末の期末在庫率は42.3%に達すると見込まれるなど、世界の砂糖需給は引き続き緩和傾向で推移するものとみられる。

なお、地域別の砂糖需給は、図1の通りである。

表1 世界の砂糖需給の推移

(単位：千トン(粗糖換算)、%)

年度	期首在庫量	生産量	輸入量	消費量	輸出量	期末在庫量	期末在庫率
1989/90	29,879	108,244	27,973	105,790	29,126	31,180	29.5
1994/95	41,641	116,726	31,803	112,686	32,672	44,812	39.8
1999/2000	62,812	133,133	36,409	127,942	39,734	64,678	50.6
2004/05	63,697	144,251	47,084	146,907	50,426	57,700	39.3
2009/10	54,979	160,315	56,023	164,755	56,244	50,317	30.5
2013/14	62,957	184,058	58,323	175,811	61,044	68,483	39.0
2014/15	68,483	183,717	59,707	177,488	62,081	72,338	40.8
2015/16	72,338	175,955	67,776	180,125	69,077	66,868	37.1
2016/17	66,868	180,442	68,525	179,979	69,937	65,919	36.6
2017/18 (2018年6月予測)	65,732	195,201	62,244	178,807	67,693	76,676	42.9
2017/18 (2018年9月予測)	65,919	193,649	64,777	180,458	67,830	76,057	42.1
2018/19 (2018年9月予測)	76,057	188,440	63,753	185,014	64,896	78,339	42.3

資料：LMC International「Quarterly Statistical Update, September 2018」

注1：年度は国際砂糖年度（10月～翌9月）。

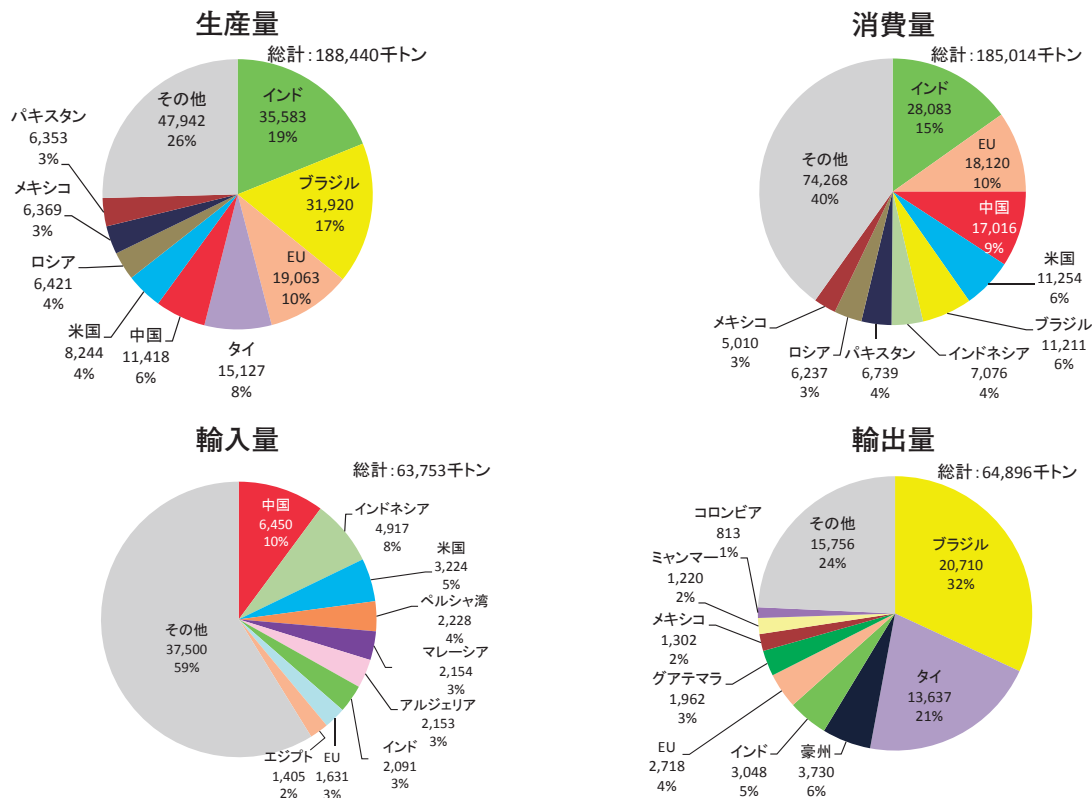
注2：2017/18年度および2018/19年度は予測値。

注3：期末在庫量は（期首在庫量＋生産量＋輸入量－消費量－輸出量）。

注4：期末在庫率は、期末在庫量を消費量で除した割合。

2. 主要国の砂糖需給（2018年9月時点予測）

図2 主要国の生産量、輸入量、消費量、輸出量（2018/19年度）



資料：LMC International「Quarterly Statistical Update, September 2018」

注1：主要国の年度は、各国の砂糖年度。

注2：主要国（上位9カ国）とその他を表示。

注3：「その他」は総計から主要国の計を差し引いた数値。

注4：輸入量のうち「ペルシャ湾」は、アラブ首長国連邦、バーレーン、オマーン、カタールの合計。

【生産量】

2018/19年度の砂糖生産量を国別に見ると、前年度世界第2位を生産量であったインドは、潤沢な降雨による単収増加を背景に、3558万トン（前年度比2.5%増）とわずかな増加が見込まれている（図2）。一方、前年度世界最大の生産国となる見込みのブラジルは、主産地の中南部で乾燥した天候が続いていることに加え、サトウキビのエタノール仕向けが増加していることなどが影響して、3192万トン（同23.1%減）と大幅な減少が見込まれている。この結果、2018/19年度はブラジルに替わってインドが世界最大の生産国になるものとみられる。

EUやロシアは、北部を中心に高温少雨状態が続いており、単収の大幅減が予想されることから、それぞれ1906万トン（同11.5%減）、642万トン（同8.3%減）とかなりの減少が見込まれている。中国は、作付面積が微増傾向で推移する中、サトウキビ産地の南部を中心に潤沢な降雨が期待できることから、1142万トン（同2.4%増）とわずかな増加が見込まれている。

【輸入量】

中国は、国内生産量が堅調に推移する中、人口増による需要の拡大を受け、645万トン（前年度比0.8%増）とわずかな増加が見込まれている。また、インドネシアやマレーシアも、経済成長に伴う需要の拡大が期待できることから、それぞれ492万トン（同22.1%増）、215万トン（同8.9%増）と前年度を上回ると見込まれている。

【消費量】

最大消費国であるインドの2808万トン（前年度比2.0%増）を筆頭に、中国では1702万トン（同0.5%増）、インドネシアでは708万トン（同2.4%増）、と、人口増による需要の拡大が予想されるアジア圏を中心に、前年度を上回ると見込まれている。

一方で、大消費地域の一つであるEUでは、1812万トン（同0.9%減）とわずかな減少が続くと見込まれており、消費量第3位の中国との差が小さくなってきている。

【輸出量】

最大輸出国であるブラジルは、生産量の減少に直結する形で輸出量が落ち込み、2071万トン（前年度比33.1%減）と大幅な減少が見込まれている。一方、タイは、1364万トン（同32.6%増）と大幅な増加が見込まれている。これは、記録的な増産となった前年度と比べると減少する見通しであるものの、潤沢な降雨が期待できることなどから、平年を上回る生産が予想されており、これを受け、輸出も増加が見込まれるためである。

干ばつが懸念されていた豪州については、CCS（可製糖率）の平均が13.66%（前年同月比0.68ポイント増）と比較的高く、これによって干ばつの影響が一部相殺されるため、生産量の増加が見込まれることから、輸出量は373万トン（前年度比4.0%増）と増加が見込まれている。

生産量の増加が見込まれているインドは、需給引き締めを図るために政府が輸出関税の撤廃や補助金の給付を行ったことなどを受け、305万トン（同17.5%増）と大幅な増加が見込まれている。ただし、同国産の砂糖は生産コストが高く、国際市場での価格競争力が弱いことなどから、輸出増加のシナリオに疑問符を投げかける向きもある。

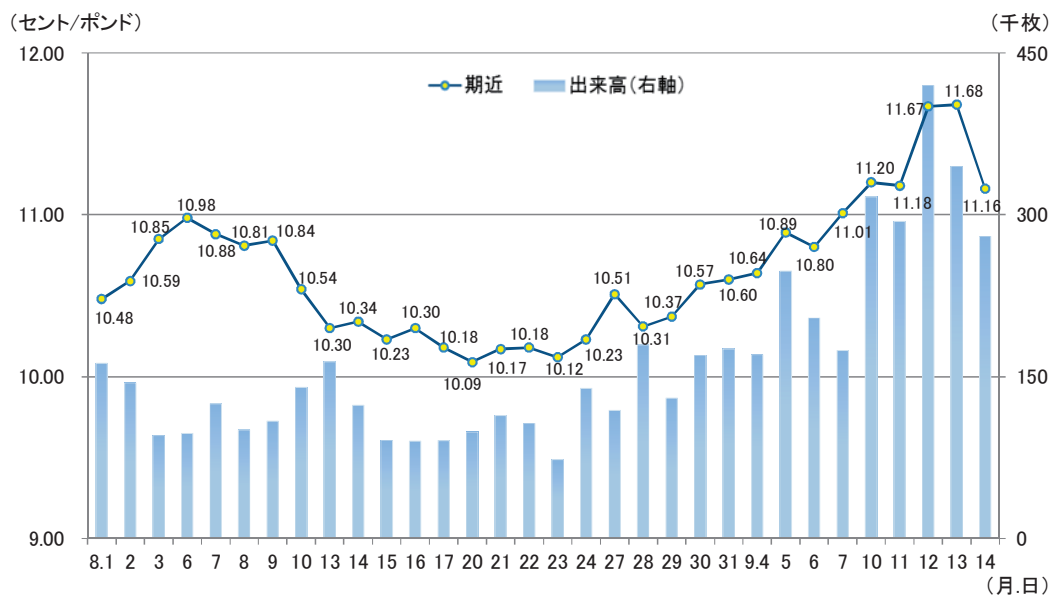
EUは、生産量の減少を受け、272万トン（同28.6%減）と大幅な減少が見込まれている。

なお、輸出補助金の給付により、前年度に輸出量を大幅に増加させたパキスタンは、少雨による生産減や、製糖業者によるサトウキビ代金の慢性的な支払遅延に伴う、綿花など他作物への転換などにより、大幅な減少が見込まれている。

3. 国際価格の動向

ニューヨーク粗糖相場の動き (8/1 ~ 9/14)
 ~ EUの減産見通しを受け、8月下旬から上昇~

図3 ニューヨーク粗糖先物相場の動き



資料：インターコンチネンタル取引所 (ICE)
 注：10月限の値。

ニューヨーク粗糖先物相場（期近^{がつきり}10月限）の2018年8月の推移を見ると、7月後半に売られ過ぎた反動から、6日にかけて1ポンド当たり10.98セントまで反発した後、ブラジル中南部の主産地で降雨があり、干ばつ発生の懸念が和らいだことに加え、ブラジルの通貨レアルの下落が続いたことなどを受け、20日には同10.09セントまで下落した。同日、一時は10年ぶりに10セント台を割り込み、同9.98セントの値を付けた。

その後、ブラジルサトウキビ産業協会 (UNICA) が24日に8月上半期のサトウキビ圧搾量を前年同期比大幅減と発表したことや、EUで猛暑などの天候悪化が懸念されたことを受け、27日にかけて同10.51セントまで上昇、31日には同10.60セント

まで上昇した。

9月に入ってから、EUの高温少雨気候に伴うてん菜の減産を懸念する向きは根強く、ブラジルにおけるサトウキビのエタノール仕向け増加と相まって価格上昇の動きは続き、7日には同11.01セントと、1カ月ぶりに11セント台に回復した。その後も10日には同11.20セント、13日には同11.68セントとなるなど上昇が続いたが、14日は買われ過ぎの反動に加え、インドが輸出助成を行うとの憶測が広がったことを受け、同11.16セントまで反落した。

(注) 1ポンドは約453.6グラム、セントは1米ドルの100分の1。

4. 世界の砂糖需給に影響を与える諸国の動向（2018年9月時点予測）

本稿中の為替レートは2018年8月末日TTS相場の値であり、1インド・ルピー=1.73円である。

ブラジル

2018/19年度（4月～翌3月）の見通し

【サトウキビ】

収穫面積：869万ha（前年度比1.3%増）

生産量：5億9500万トン（同7.2%減）

【砂糖（甘しゅ糖）】

生産量：3192万トン（同23.1%減）

輸出量：2071万トン（同33.1%減）

2018/19年度の砂糖生産量、前月予測から下方修正

2018/19砂糖年度（4月～翌3月）のサトウキビ収穫面積は869万ヘクタール（前年度比1.3%増）とわずかな増加が見込まれている（表2）。しかし、サトウキビ生産量は、北東部を中心に乾燥気候が続いている影響から、5億9500万トン（同7.2%減）とかなりの程度の減少が見込まれている。これを受け、砂糖生産量は、前月予測から2.0%下方修正され、3192万トン（同23.1%減）と前年度からの大幅な減少が見込まれている。

サトウキビ生産量については、降雨の少ない状態が10月まで続くとの報道を受け、また、砂糖生産量については、価格優位性のあるエタノールへの仕向けが増えると見込まれることを受け、多くの民間調査会社も同様に、サトウキビ生産量、砂糖生産量がともに前年度を下回ると見込んでいる。

また、UNICAは8月24日、8月上半期のサトウキビ圧搾量が3356万トン（前年同期比26.1%減）、砂糖生産量は171万トン（同45.9%減）と、ともに大幅に減少したと発表した。これは、降雨による5日程度の収穫遅れが主因であるとされるが、UNICAは、エタノール需要の拡大と砂糖価格の低迷が続く中、今年度の砂糖生産が大きく減少する兆

候が見られると警戒している。

主産地の中南部、過去5年で最低の生産量

現地報道によると、砂糖生産シェアの9割を有する中南部における、2018/19年度の製糖業者のサトウキビ処理量が、5億8400万トン（前年度比4%減）と4年ぶりの低水準にとどまる見通しである。サンパウロ州を中心とした深刻な干ばつに加え、国際相場低迷に伴う、サトウキビ畑の更新遅れなど設備投資の先細りが、背景にあるとしている。

民間調査会社は、2018年下半期については、エルニーニョ現象により一定の降雨を得られる公算が高いものの、10月までの向こう数週間にかけてまとまった降雨が得られない場合、2019/20年度の生産にも影響が生じる可能性を示唆している。

サトウキビ農家、品目切り替えの動き

現地報道によると、世界的に砂糖需給が緩慢な状態が続き、砂糖価格の低迷が続く中、一部の農家の間では、サトウキビから大豆へと品目を切り替える動きが見られる。

中国における食肉需要の台頭を受け、ブラジル産大豆の輸入量が、ここ5年で2.5倍と急増している。米中間の貿易紛争が長期化の様相を呈する中、今後

も輸入需要は拡大の一途をたどると見込まれており、一部の農家は、価格の低迷が続くサトウキビから大豆へと品目を切り替えているという。製糖業者の間では、こうした「大豆ブーム」に抗うのではな

く、むしろサトウキビ畑の更新時に大豆の栽培を奨励する（これまでは単に休閑地となっていた）など、品目ローテーションの一環に、収益性の高い大豆栽培を積極的に取り入れる動きが見られる。

表2 ブラジルの砂糖需給の推移

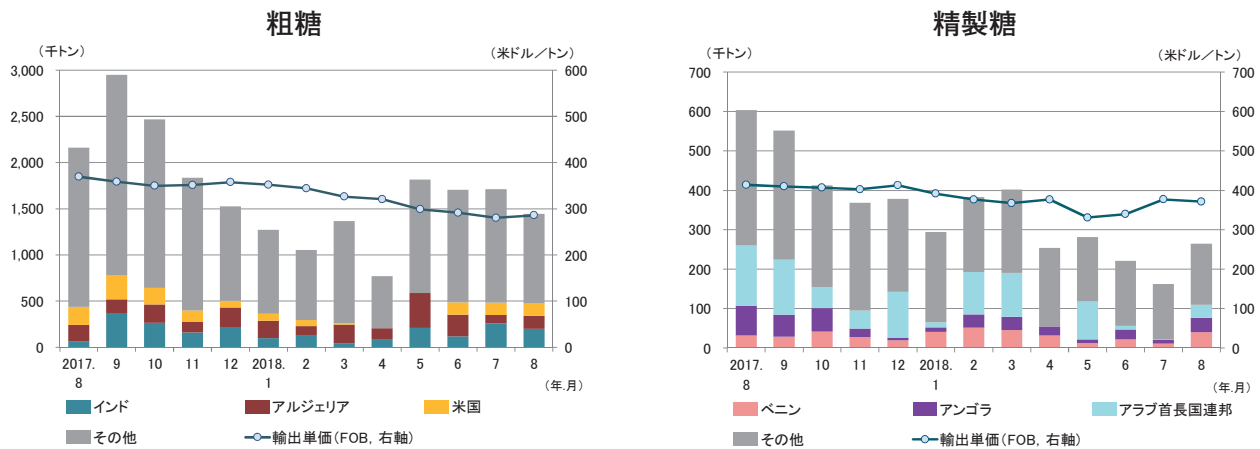
(単位：千ha、千トン、%)

年度	2015/16	2016/17	2017/18	2018/19 (8月予測)	2018/19 (9月予測)	前年度比 (増減率)	
収穫面積	8,188	8,474	8,570	8,685	8,685	1.3	
サトウキビ生産量	666,824	651,841	640,860	595,000	595,000	▲ 7.2	
砂糖	生産量	36,472	41,670	41,490	32,570	31,920	▲ 23.1
	輸入量	1	1	2	2	2	▲ 5.7
	消費量	12,057	11,502	11,100	11,408	11,211	1.0
	輸出量	26,023	30,117	30,978	21,157	20,710	▲ 33.1
	期末在庫量	739	791	205	16	207	0.7
	期末在庫率	6.1	6.9	1.85	0.14	1.84	0.01 ポイント減

資料：LMC International 「Monthly Sugar Information in Major Countries, September 2018」

注：期末在庫量、期末在庫率および各項目の前年度比は、端数処理の関係で表中の値の計算結果と一致しない場合がある。

(参考) ブラジルの砂糖（粗糖・精製糖別）の輸出量および輸出単価の推移



資料：「Global Trade Atlas」

注：HSコード1701.14（粗糖）および1701.99（精製糖）の数値。国別データは直近月の上位3カ国を表示。

インド

2018/19年度（10月～翌9月）の見通し

【サトウキビ】

収穫面積：512万ha（前年度比6.1%増）

生産量：4億443万トン（同2.8%増）

【砂糖（甘しゅ糖）】

生産量：3558万トン（同2.5%増）

輸出量：305万トン（同17.5%増）

2018/19年度の砂糖生産量は増加見通しも、在庫処理が課題

2018/19砂糖年度（10月～翌9月）のサトウキビ生産については、収穫面積は512万ヘクタール（前年度比6.1%増）とかなりの程度の増加が見込まれている。生産量は、主要生産州で潤沢な降雨を得られる見通しであるものの、4億443万トン（同2.8%増）と、面積の増加に比して増加はわずかなものと見込まれている（表3）。

砂糖生産量は、サトウキビの増産を受け、3558万トン（同2.5%増）とわずかな増加が見込まれている。砂糖輸出量は、305万トン（同17.5%増）と、大幅な増加が見込まれているものの、前月予測からは大幅に下方修正された。

政府は、積み上がった在庫を輸出増によって処理する方針を打ち出しているが、国際市場における価格競争力がないことなどから輸出は伸び悩んでいる。製糖業者に対して2017/18年度中に追加で200万トンの砂糖輸出を要請していたが、9月初旬の段階では、目標の半分にも遠く及ばない45万トンの輸出にとどまっている。現地報道によると、インド製糖協会（ISMA）は、12月までに700万トン近くの砂糖を輸出できないと、サトウキビ農家の債務が倍近くに膨れ上がるとの見通しを示して危機感を募らせているが、輸出の増加は今後も緩慢なものとなる可能性がある。

主産地で点滴かんがいの導入を推進

主産地の一つであるマハラシュトラ州は、州政府

が義務付けている点滴かんがいの導入ができていない場合には、製糖業者や州協同組合銀行に対し、生産組合との間に締結したサトウキビ供給契約を停止するなどの厳しい制裁を科すと発表した。

現地報道によると、州政府は2017年、州内の約37万ヘクタールのサトウキビ農地における、2019年までの点滴かんがいの導入を義務化している。中央政府は、1ヘクタール当たり8万5400インド・ルピー（14万7742円）の助成金を、全国農業農村開発銀行から得た長期融資によってあてがうとしている。また、州協同組合銀行に対しては、導入目的のローン申請（生産者および製糖業者が対象）について、50%以上を受理するよう指示していた。

エタノール生産、蒸留企業も参入

現地報道によると、インド政府が7月27日、サトウキビ圧搾汁からのエタノールの直接生産を認めると発表した（詳細については「砂糖類・でん粉情報」2018.9月号を参照）ことを受け、10月には、製糖業者以外の企業もサトウキビ圧搾汁からのエタノールの直接生産に参入する。

ISMAによると、2017/18年度のエタノール生産量は113万キロリットル（前年度比7割増）となり、エタノール生産能力については今年度さらに25万キロリットル増強されるとしているが、ガソリンへのエタノール混合率5%（最終目標は10%とされる）を達成するには、なお133万キロリットル近くのエタノールが不足しているとされる。

ISMAは、3200万トン余りの砂糖生産を記録し

た2017/18年度に続き、2018/19年度も3500万トン以上の砂糖生産が見込まれる中、エタノール生

産の拡大を通して砂糖需給の引き締めを図りたいとしている。

表3 インドの砂糖需給の推移

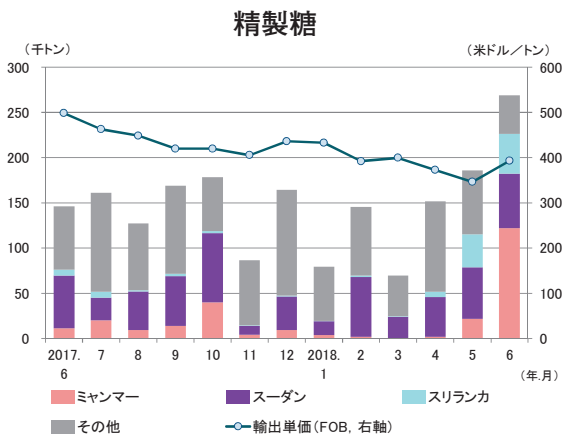
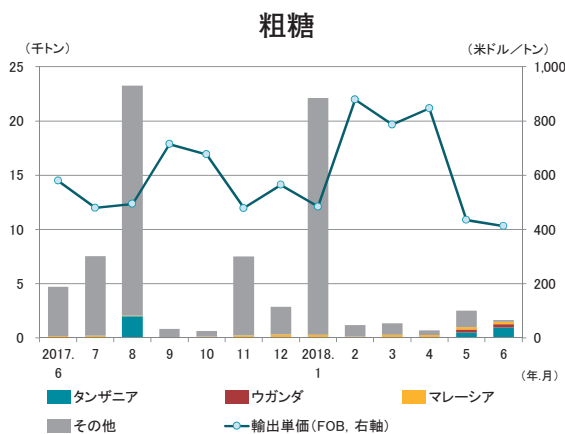
(単位：千ha、千トン、%)

年度	2015/16	2016/17	2017/18	2018/19 (8月予測)	2018/19 (9月予測)	前年度比 (増減率)
収穫面積	4,806	4,327	4,827	5,120	5,120	6.1
サトウキビ生産量	356,871	306,070	393,320	404,434	404,434	2.8
砂糖	生産量	27,091	21,848	34,720	35,583	2.5
	輸入量	2,146	2,458	2,250	2,028	▲ 7.1
	消費量	26,784	26,568	27,540	28,083	2.0
	輸出量	3,955	2,233	2,594	3,859	17.5
	期末在庫量	8,370	3,874	10,711	16,380	61.1
	期末在庫率	31.2	14.6	38.9	58.3	61.4

資料：LMC International「Monthly Sugar Information in Major Countries, September 2018」

注：期末在庫量、期末在庫率および各項目の前年度比は、端数処理の関係で表中の値の計算結果と一致しない場合がある。

(参考) インドの砂糖(粗糖・精製糖別)の輸出量および輸出単価の推移



資料：「Global Trade Atlas」

注：HSコード1701.14(粗糖)および1701.99(精製糖)の数値。国別データは直近月の上位3カ国を表示。

中国

2018/19年度(10月～翌9月)の見通し

【サトウキビ】

収穫面積：125万ha(前年度比1.1%増)
生産量：7775万トン(同1.3%増)

【てん菜】

収穫面積：22万ha(同20.5%増)
生産量：1118万トン(同16.6%増)

【砂糖(甘しゅ糖およびてん菜糖)】

生産量：1142万トン(同2.4%増)
輸入量：645万トン(同0.8%増)

2018/19年度、砂糖生産量は増加見通し

サトウキビについては、2018/19砂糖年度(10月～翌9月)の収穫面積は125万ヘクタール(前年

度比1.1%増)、生産量は7775万トン(同1.3%増)と、前月予測から変わらず、ともにわずかな増加が見込まれている(表4)。同年度のてん菜の収穫面

積は22万ヘクタール（同20.5%増）、生産量は1118万トン（同16.6%増）と、ともに大幅な増加が見込まれている。

砂糖生産量は、主要なサトウキビ生産地域（南部）で潤沢な降雨が得られる見通しであることから、サトウキビ生産量が増加すると見込まれていることを受け、1142万トン（同2.4%増）とわずかな増加が見込まれているが、依然として国内消費量を大きく下回る水準となっている。

台風22号、サトウキビ生産には影響なし

香港やフィリピンに甚大な被害をもたらした台風22号は、中国南部に上陸した。しかし、サトウキビの主産地である広東省や広西チワン族自治区には直撃しなかったことから、影響は限定的とみられる。現地専門家によると、一部に倒伏が見られるが、砂糖生産への影響はほとんどないとされる。また、今後天候が好転すれば、今回の降雨はむしろ、単収向上に一役買うとして、降雨を好意的に捉える向きもある。

表4 中国の砂糖需給の推移

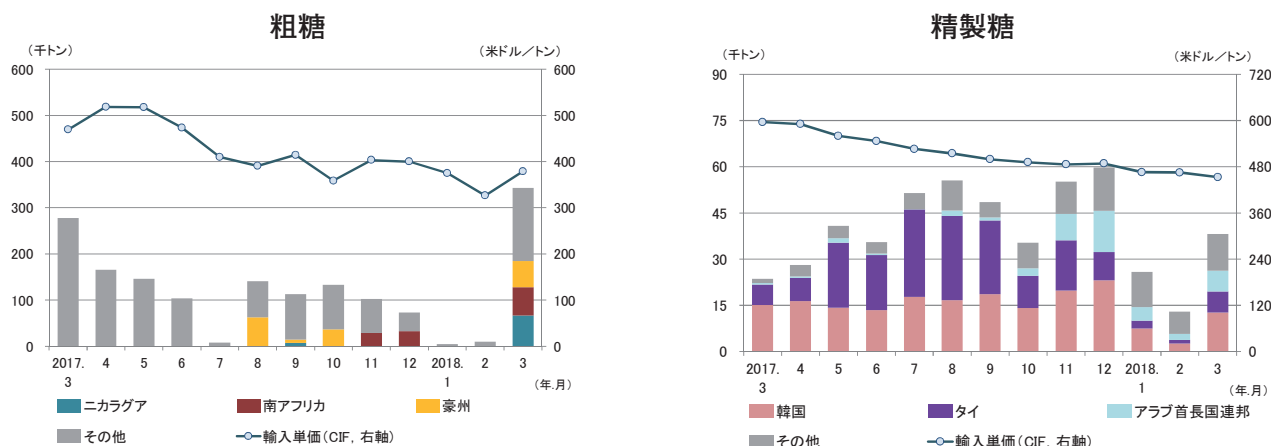
(単位：千ha、千トン、%)

年度	2015/16	2016/17	2017/18	2018/19 (8月予測)	2018/19 (9月予測)	前年度比 (増減率)	
サトウキビ収穫面積	1,311	1,178	1,231	1,245	1,245	1.1	
サトウキビ生産量	74,950	73,690	76,780	77,749	77,749	1.3	
てん菜収穫面積	136	168	186	224	224	20.5	
てん菜生産量	6,880	8,820	9,590	11,182	11,182	16.6	
砂糖	生産量	9,405	10,041	11,147	11,418	11,418	2.4
	輸入量	7,910	5,877	6,398	6,450	6,450	0.8
	消費量	16,847	16,847	16,931	17,016	17,016	0.5
	輸出量	181	146	133	154	154	15.8
	期末在庫量	11,926	10,851	11,332	11,385	12,030	6.2
	期末在庫率	70.8	64.4	66.9	66.9	70.7	3.8ポイント増

資料：LMC International「Monthly Sugar Information in Major Countries, September 2018」

注：期末在庫量、期末在庫率および各項目の前年度比は、端数処理の関係で表中の値の計算結果と一致しない場合がある。

(参考) 中国の砂糖（粗糖・精製糖別）の輸入量および輸入単価の推移



資料：「Global Trade Atlas」

注：HSコード1701.14（粗糖）および1701.99（精製糖）の数値。国別データは直近月の上位3カ国を表示。

E U

2018/19年度（10月～翌9月）の見通し

【てん菜】

収穫面積：172万ha（前年度比0.6%減）
生産量：1億2180万トン（同9.5%減）

【砂糖（てん菜糖）】

生産量：1906万トン（同11.5%減）
輸出量：272万トン（同28.6%減）

2018/19年度の砂糖生産量、乾燥気候と高温を受け下方修正

2018/19砂糖年度（10月～翌9月）のてん菜の収穫面積は、172万ヘクタール（前年度比0.6%減）とわずかな減少が見込まれている（表5）。生産量は、高温による単収減の影響から、1億2180万トン（同9.5%減）とかなりの程度減少が見込まれている。8月も引き続き降雨量が平年を下回っており、北部を中心に減産となるものとみられる。

糖分含有率が例年よりも比較的高い水準にはあるものの、高温少雨気候に伴うてん菜の減産をカバーするほどではなく、砂糖生産量は1906万トン（同11.5%減）とかなり大きな減少が、輸出量は272万トン（同28.6%減）と大幅な減少が、それぞれ見込まれている。

現地報道によると、フランスやドイツ、ポーランド、英国といったEU北部の主要なてん菜産地では、夏の猛暑によって単収の大幅な低下が見込まれている。今年度の春先に見られた低温や多雨に伴う作付けの遅れについては、好天に恵まれ回復したとされていたが、7月からの猛暑を受け、かんがいを導入していない圃場ほじょうを中心に単収低下が深刻化しており、8月に発表された単収見通しは、前年同月比15.0%減となる1ヘクタール当たり13.6トン（前月＝13.9トン、前年同月＝16.0トン）とかなり大きく減少すると見込まれている。

一方で、生産者団体からは、今回の単収低下の発表は、前年度に大幅な増産を記録した砂糖の需給引き締めにつながるので、むしろ歓迎するとの声も聞かれた。

糖類を含む飲料に関する課税、消費活動への影響はわずか

2018年4月、糖類を含む飲料に関する課税が英国で導入された（導入経緯などの詳細についてはhttps://www.alic.go.jp/chosa-c/joho01_002228.htmlを参照）が、導入前後で消費者の購買活動には大きな変化が生じていないとの民間団体の調査結果が公表された。

課税導入前後で消費者に対して意識調査を実施したところ、20%が「商品表示を以前より細かく見るようになった」と回答した一方、過半数の62%が「変わらない」と回答した。また、導入前の段階では、11%が「糖類を含む飲料の購入を止める」と回答していたが、導入後に実際に購入を止めた者は1%にとどまるなど、消費者の購買活動には大きな変化を来していないことが明らかになったとされる。

一方、課税導入後も過半数の54%が課税を支持し、「課税対象を菓子類まで拡大すべき」との意見も7割近い支持を集めるなど、糖類の摂取を削減したいという消費者の意識が引き続き高い水準にあることも、同時に読み取れる結果となった。

表5 EUの砂糖需給の推移

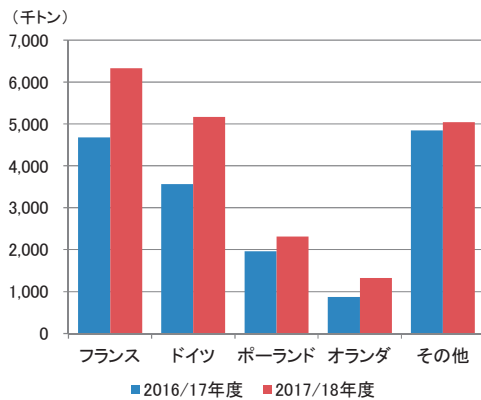
(単位：千ha、千トン、%)

年度	2015/16	2016/17	2017/18	2018/19 (8月予測)	2018/19 (9月予測)	前年度比 (増減率)
収穫面積	1,364	1,467	1,729	1,719	1,719	▲ 0.6
てん菜生産量	94,855	108,023	134,626	127,335	121,799	▲ 9.5
砂糖	生産量	14,937	17,521	21,539	20,017	▲ 11.5
	輸入量	3,651	3,115	1,739	1,413	▲ 6.3
	消費量	19,481	18,828	18,283	18,169	▲ 0.9
	輸出量	1,501	1,510	3,805	3,261	▲ 28.6
	期末在庫量	1,913	2,211	3,401	3,383	▲ 4.2
	期末在庫率	9.8	11.9	18.6	18.6	18.0

資料：LMC International「Monthly Sugar Information in Major Countries, September 2018」

注：期末在庫量、期末在庫率および各項目の前年度比は、端数処理の関係で表中の値の計算結果と一致しない場合がある。

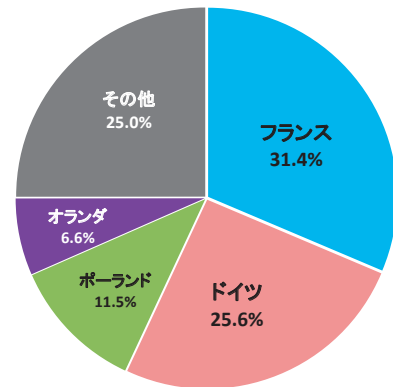
(参考) EUの主要国別砂糖生産見通しおよび生産割合 (2018年7月時点)



資料：欧州委員会

注1：精製糖換算。

注2：2016/17年度は推定値、2017/18年度は予測値。



資料：欧州委員会

注：2017/18年度。

5. 日本の主要輸入先国の動向 (2018年9月時点予測)

近年、日本の粗糖（甘しや糖・分みつ糖〈HSコード1701.14-110〉および甘しや糖・その他〈同1701.14-200〉の合計）の主要輸入先国は、タイ、豪州、南アフリカ、フィリピン、グアテマラであったが、2017年の主要輸入先国ごとの割合は、豪州が69.5%（前年比17.3ポイント増）、タイが25.0%（同22.7ポイント減）と、この2カ国で9割以上を占めている（財務省「貿易統計」）。

豪州およびタイについては毎月の報告、南アフリカ、フィリピン、グアテマラについては、原則として3カ月に1回の報告とし、今回はグアテマラを報告する。本稿中の為替レートは2018年8月末日TTS相場の値であり、1タイ・バーツ=3.47円である。

豪州

2018/19年度（4月～翌3月）の見通し

【サトウキビ】

収穫面積：39万ha（前年度比2.3%増）

生産量：3358万トン（同0.2%増）

【砂糖（甘しや糖）】

生産量：478万トン（同6.7%増）

輸出量：373万トン（同4.0%増）

2018/19年度、砂糖生産量は増加も、干ばつを受け下方修正

2018/19砂糖年度（4月～翌3月）のサトウキビ収穫面積は、39万ヘクタール（前年度比2.3%増）とわずかな増加が見込まれている。生産量は、3358万トン（同0.2%増）とわずかな増加が見込まれているものの、干ばつの影響で8月の降雨が引き続き少なかったことから、前月予測から1.1%下方修正された（表6）。

これに伴い、砂糖生産量は478万トン（同6.7%増）とかなりの程度の増加が見込まれている。輸出量は373万トン（同4.0%増）とやや増加が見込まれているが、国内消費量については、一部の消費者の間で、健康意識の高まりなどから砂糖の消費を敬遠する動きがあり、108万トン（同4.0%減）と前年度をやや下回ると見込まれている。

こうした見通しの方で、現地製糖業者によると、干ばつが深刻なのは、畜産や牧草生産が盛んな豪州南東部の沿岸で、サトウキビ主産地の豪州北東部（クイーンズランド州中部～北部）ではむしろ、少ない降雨によって、製糖歩留まりや単収の向上がもたらされるため、今年度開始時点の見通しを上回る生産

量が見込まれる、といった楽観的な見通しも聞かれている。

モラセス、飼料用作物としての需要が高まる

現地報道によると、牧草や綿実といった飼料用作物が、干ばつによる記録的な不作で価格が高騰する中、酪農家や肉牛肥育農家の間では、糖蜜（モラセス）由来の飼料を一時的に給与するといった動きがみられる。モラセスに合成タンパク質を添加したものが主に用いられているが、栄養失調などの改善によく効く上、牛の食い付きがよく、牧草よりも（トラックなどで）一度にたくさんの飼料を運搬できるとして評判も上々である。

一方で、モラセスなどの副産物は、すでにサトウキビ生産者と製糖業者との間で供給契約が締結されており、余剰が少ないため、今後、安定的な調達課題とされる。

なお、日本でもサトウキビ糖蜜由来の飼料は生産されており、糖蜜飼料は、胃中の微生物やバクテリアにとって栄養源として有用であるといわれている。

表6 豪州の砂糖需給の推移

(単位：千ha、千トン、%)

年度	2015/16	2016/17	2017/18	2018/19 (8月予測)	2018/19 (9月予測)	前年度比 (増減率)
収穫面積	382	368	377	386	386	2.3
サトウキビ生産量	34,941	36,506	33,495	33,965	33,576	0.2
砂糖	生産量	4,889	4,816	4,481	4,834	6.7
	輸入量	164	67	30	30	0.0
	消費量	1,196	1,172	1,125	1,080	▲ 4.0
	輸出量	4,384	4,004	3,585	3,780	4.0
	期末在庫量	1,267	974	775	779	▲ 0.2
	期末在庫率	105.9	83.1	68.9	72.1	71.6

資料：LMC International「Monthly Sugar Information in Major Countries, September 2018」

注：期末在庫量、期末在庫率および各項目の前年度比は、端数処理の関係で表中の値の計算結果と一致しない場合がある。

タイ

2018/19年度（10月～翌9月）の見通し

【サトウキビ】

収穫面積：178万ha（前年度同）

生産量：1億3145万トン（前年度比2.6%減）

【砂糖（甘しゅ糖）】

生産量：1513万トン（同2.9%減）

輸出量：1364万トン（同32.6%増）

2018/19年度、生産量は微減も、輸出は好調

2018/19砂糖年度（10月～翌9月）のサトウキビ収穫面積は178万ヘクタール（前年度同）と横ばいが見込まれている。生産量は1億3145万トン（前年度比2.6%減）と、記録的な単収増となった前年度の生産量と比べると、わずかな減少が見込まれているものの、潤沢な降雨が得られる見通しであることから、引き続き高い水準での推移が続くと見込まれている（表7）。

砂糖生産量は、サトウキビ生産量の減少を受け、1513万トン（同2.9%減）とわずかな減少が見込まれているが、国内消費を上回る生産が続いていることから、輸出量は、1364万トン（同32.6%増）と2年度連続の大幅な増加が見込まれている。この結果、2017/18年度に大幅に増加した期末在庫については、2018/19年度は大幅に減少し、例年並みの水準に戻ると見込まれている。

輸出用粗糖の入札、低調な結果に

8月22日、輸出用粗糖の3回目の入札が行われたが、入札量12万トンに対し、落札量は1万2000トン、価格についても、低迷する国際相場を反映し、「+50セント」という価格にとどまるなど、低調な結果となったと現地報道は伝えている。

7月4日に行われた1回目の入札では2万4000トンが落札となったものの、18日の2回目入札は価格が折り合わず不調となっていた。

タイでは、80万トンの粗糖輸出枠が設定されており、半分の40万トンは製糖工場に振り分けられ、残りの40万トンは、タイ・サトウキビ砂糖公社が入札により、輸出業者を決定している。落札金額のうち、国際価格（ニューヨーク相場No.11）に上乘せされた額が「タイプレミアム」と呼ばれており、輸出向け砂糖価格の指標としての性格が強いとされている。

生産者協会、国内外の価格差拡大に対する支援を政府に要請

サトウキビ生産者協会は、産業省に対し、低迷する国際価格との差額を穴埋めするようなさらなる施策の実施を求める要望書を提出した。

これまで、国際価格と国内価格の差額を穴埋めする基金制度はあったが、国際価格が低迷した2017/18年度はその差額が大きく、150億タイ・バーツ（521億円）近くを投じた結果、基金が赤

字となったとされる。国際価格の低迷が続く2018/19年度は、その差額がさらに大きくなると見込まれており、440億タイ・バーツ（1527億円）近い予算が必要となるとされるため、こうした追加資金の注入を政府に求めている。

しかし、追加資金の注入を実施すれば、貿易相手国からの反発が必至であることから、今後の対応が注目される。

表7 タイの砂糖需給の推移

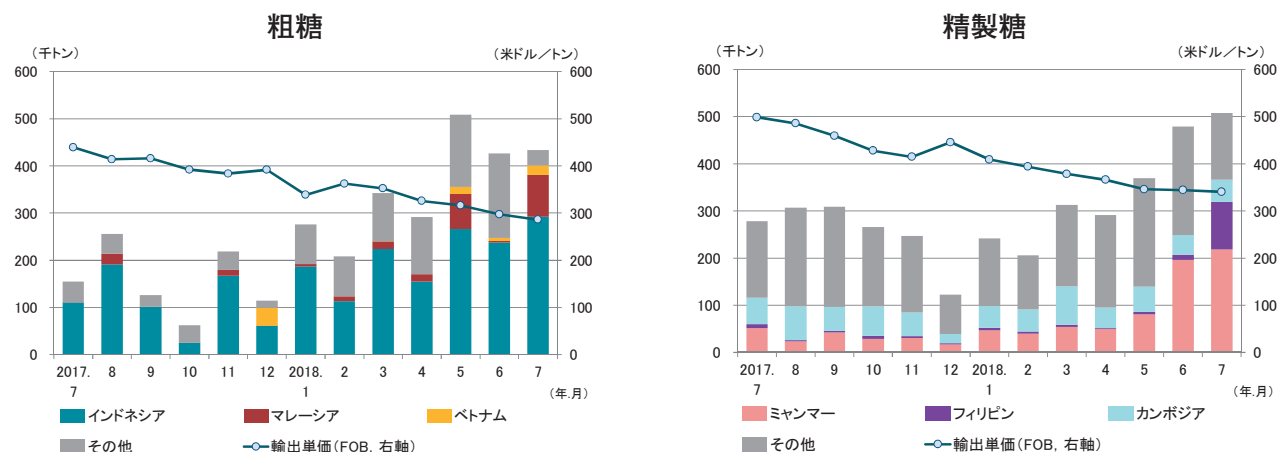
(単位：千ha、千トン、%)

年度	2015/16	2016/17	2017/18	2018/19 (8月予測)	2018/19 (9月予測)	前年度比 (増減率)
収穫面積	1,644	1,578	1,776	1,708	1,776	0.0
サトウキビ生産量	94,047	92,951	134,929	131,513	131,451	▲2.6
砂糖	生産量	10,402	10,657	15,586	15,135	▲2.9
	輸入量	1	0	1	1	0.0
	消費量	3,272	3,283	3,505	3,294	▲6.0
	輸出量	7,932	7,393	10,286	13,337	32.6
	期末在庫量	3,970	3,951	5,747	3,952	▲31.4
	期末在庫率	121.3	120.3	164.0	120.0	119.8

資料：LMC International「Monthly Sugar Information in Major Countries, September 2018」

注：期末在庫量、期末在庫率および各項目の前年度比は、端数処理の関係で表中の値の計算結果と一致しない場合がある。

(参考) タイの砂糖（粗糖・精製糖別）の輸出量および輸出単価の推移



資料：[Global Trade Atlas]

注：HSコード1701.14（粗糖）および1701.99（精製糖）の数値。国別データは直近月の上位3カ国を表示。

グアテマラ

2018/19年度（10月～翌9月）の見通し

【サトウキビ】

収穫面積：26万ha（前年度同）

生産量：2752万トン（前年度比6.1%増）

【砂糖（甘しゅ糖）】

生産量：286万トン（同3.5%減）

輸出量：196万トン（同5.7%減）

2018/19年度、砂糖生産量と輸出量はともに前年度を下回る見通し

2018/19砂糖年度（10月～翌9月）のサトウキビ収穫面積は26万ヘクタール（前年度同）と横ばいが見込まれている一方、生産量は2752万トン（前年度比6.1%増）とかなりの程度増加し、回復が見込まれている（表8）。

しかし、砂糖生産量については、前年度を下回る286万トン（同3.5%減）とやや減少すると見込まれている。輸出量についても196万トン（同5.7%減）と軟調な推移が見込まれており、直近月（7月）は前年同月比で2割程度の減少が見られるとしている。

表8 グアテマラの砂糖需給の推移

（単位：千ha、千トン、%）

年度	2015/16	2016/17	2017/18	2018/19 (9月予測)	前年度比 (増減率)	
収穫面積	269	256	264	264	0.0	
サトウキビ生産量	27,987	25,835	25,936	27,517	6.1	
砂糖	生産量	3,039	2,927	2,965	2,860	▲ 3.5
	輸入量	0	0	0	0	—
	消費量	839	861	879	898	2.1
	輸出量	2,210	2,164	2,081	1,962	▲ 5.7
	期末在庫量	858	761	766	766	0.1
	期末在庫率	102.3	88.4	87.1	85.3	1.8 ポイント減

資料：LMC International [Monthly Sugar Information in Major Countries, September 2018]

注：期末在庫量、期末在庫率および各項目の前年度比は、端数処理の関係で表中の値の計算結果と一致しない場合がある。